

人の心を虜にし、蝕むドラッグ（その 1）

臨床心理士

ゲートドラッグの有機溶剤

榎場 雅子

池袋駅近くで、脱法ドラッグ使用後の酩酊状態で無謀な運転により、通行人を次々とはね、死傷者 8 人もの犠牲者を出した事件は、今もなお人びとの記憶に新しいところだと思います。

これに触発されたように、他市においても同じような事件が続発しました。更にドラッグの問題には早くから熱心だった神奈川県が、脱法ドラッグの不法所持と使用容疑で逮捕されるに及んで、漸く捨ててはおけない大きな社会問題として認識されるようになりました。その名も「脱法ドラッグ」から「危険ドラッグ」に改称され、取り締まりも強化されました。

今日、第 3 次薬物乱用期と考えられています。乱用される薬物は時代によって違い（流行）がありますが、乱用者の数と法による取り締まり強化は、いたちごっここの様相を呈しています。確かに取り締まりを強化すると、乱用者は一時的に減少しますが、2～3 年で乱用者は増加に転じ、右肩上がりに経過、ピークに達します。法によって禁じられている薬を取り締まる事は当然ですが、それだけでは問題の解決にはなりません。

唐突ですが、ゲートドラッグという言葉をご存知でしょうか。主に青少年の間で乱用される有機溶剤のことです。乱用は 10 代後半に始まって、20 代につながり、30 代になると本格的なドラッグへと移行します。人の心を虜にし、蝕むドラッグのゲートとなるのが有機溶剤です。これからの社会を担うべき青少年の問題として、ゆゆしきことであり、重大な社会問題です。

有機溶剤は「毒物及び劇物取締法」によって規制されている薬物です。それにもかかわらず、乱用者は根深く蔓延しています。理由は非行と見做されている少年だけでなく、一般の少年の間にも広がっており、地域的にも大都市だけでなく、地方の市町村にまで及んでいるからです。この厳しい現実、一般には認識されていないのではないのでしょうか。実例を紹介しましょう。

J さん宅は地方都市に住むサラリーマン世帯で、両親と高校 2 年の J さんと、父方の祖母の 4 人家族です。一見すると何の問題もない家庭でした。ところがある日曜日、J さんは突然に「忍者がいる！」と叫んで祖母に襲いかかり、大けがを負わせてしまいました。実はこの時、J さんはトルエン吸引後の幻覚状態でした。後日、J さんは「その時の事はよく覚えていない。トルエンは前からやっていた。携帯で友達と連絡を取り合ってた」と述べています。両親は「J がこんな恐ろしい事に手を染めているとは、夢にも思わなかった。有機溶剤の事は聞いていたが、我が子の上まで及んでいるとは全く考えた事はなかった」と嘆いていました。祖母は「有機溶剤の匂いで J を疑った事があったが、怖くて聞けなかった」と述べています。

三者三様、「今さらに」と思われがちな反応ですが、現代社会では決して珍しくない、家族のひとつの姿です。事件が家族の在り方を、そしてトルエンの問題を教えてくれているのです。

人の心を虜にし、蝕むドラッグのゲートは、誰でもが簡単に入手できる有機溶剤です。それは決して狭き門ではありません。

有機溶剤が若者の心を捉えたのは、1960年代のアメリカで流行した模型飛行機用接着剤の吸引が最初でした。それは忽ちのうちに世界中の若者達を中心に広がりました。わが国では、群馬や京浜地区で起き、またたく間に全国に及んでいきました。1967年には、フーテン族が新宿の駅前広場（通称グリーンハウス）で、公然と吸引するようになりました。アメリカのヒッピー族が大麻を吸いながら、反戦運動をしていたのを真似たものでした。

有機溶剤の乱用が広がるにつれ、乱用による犯罪や事故死が増え、法的に規制されました。乱用の動機は「友達から誘われた」「むしゃくしゃしていた」が大半を占め、大人から断絶し、自分達だけの体験世界を求める若者特有の好奇心や冒険心を覗かせています。それは少年が、喫煙したり飲酒すると同程度の冒険心と罪悪感で、その場の好奇心や冒険心を抑えきれない性格傾向と、それを助長する遊び仲間や、退廃的で享乐的な情報の氾濫など環境的・社会的要因によると、指摘されています。

若者達が好むトルエンは、①心地よい陶酔感が得られる、②入手法も使用法も簡単である、③効果がすぐ現れる、④比較的安い、⑤持ち運びが容易、⑥規制があっても捕まる事は少ない、と臆面もなく言っています。まさに「叩けよ、さらば開かれん」といった状態です。

有機溶剤とは、炭素を主成分とする有機分を溶かす液体の総称です。体内に吸い込まれると脳に溶解込み、中枢神経系を抑制するダウン系ドラッグです。酒や麻酔薬に作用が似ています。知性や道德心をコントロールする大脳皮質の機能を抑えるために、本能の座である旧皮質が、前面に出てきます。酔っ払いと同じで判断能力や理性は低下しても、行動力は保たれています。窃盗や暴行、傷害などの罪を犯す事になります。酒と違うのは知覚の変化が起こる事です。

錯覚や幻覚は、有機溶剤がドパミンやセロトニンを中心とした、モノアミン系を変化させたために起こります。繰り返しますが、他のドラッグと同じように中脳辺縁ドパミン系システムを動かして、恍惚感や幸福感を与え、現実では求められない心地の良さを感じて、更なる乱用を誘い、依存へと進んでいきます。

怖いのは精神依存を起こす仕組みです。一度でも使って得られた快感は脳に刻み付けられ、繰り返し乱用した結果、自分の意志の力ではやめられなくなります。これが精神依存です。さらに怖いのは、有機溶剤ではかなりの頻度で中毒性精神病になるという事です。

因みに、無作為に抽出した公立中学52校の調査では、男子の2.1%、女子の0.9%、全体の1.5%が有機溶剤を吸った経験があると答えています（日本PTA全国協議会調べ）。

とまれ、人がドラッグに依存してしまうメカニズムを理解し、そのドラッグのゲートである有機溶剤の乱用から守る事が、本人はもとより、友人たちのためにも、社会の健康のためにも、大切な事ではないでしょうか。

〈編集日より〉

★遅くなりましたが、執筆者の榎場雅子主任相談員のプロフィールを簡単にご紹介します。

臨床心理士、精神保健福祉士、社会福祉士、都立大（現首都圏大学東京）大学院修了、法務省入省、家庭裁判所調査官として勤務後結婚退職、50代から児童相談所で児童問題、秋元病院や江戸川病院で精神疾患や認知症高齢者の心のケアなどの相談業務に長年従事。80歳を超えた今も健康に恵まれ、これまでの専門的知識・経験などを社会に役立てたいということで、「新しいふれあい社会」をボランティアで毎月執筆中。

★我孫子市内約3400人の中学生は大丈夫でしょうか。単純に1.5%を当てはめると…。市内の子どもたちからドラッグ被害者を一人も出さない！今、大人たちに求められるのはこの覚悟です（h）。

ご意見、ご質問などを事務局までお寄せください。